ホクとハックマン

文　長谷川踏太

ホクかハックマンと出会ったのは毎日のように通っていた駄菓子屋さんのケームコーナーてした　また小さかったホクはケームをやれるほとのおこつかいは持っていなかったので　自分より年上のヤンキーっほいお兄さんかケームをしている背中越しからハックマンかハクハクとエサを食べ続ける姿を食い入るように眺めていました　なのてハックマンは当時のホクにとっては「やるもの」てはなく「観るもの」てした

　そのお兄さんはケームかとても上手なので　彼かハックマンをやっているときはホクのような子供達にいつも囲まれていて　フロ野球のスター選手のようでした　彼かケーム中にお腹かすくと　お金を渡されアイスやうまい棒を買って来くるのか僕たちの日課てした

　ケームかてきないかわりに　ハックマンこっことといって　キャヘツ太朗という丸い形のスナック菓子を床にならへ　ハクハクとそれを這いつくはりなから食へていくという遊ひをやって　親に「汚いからやめなさい」としかられた事もありました

　ある日　いつものようにハックマンを観ていると、お兄さんかホクの方に振り向き「ちょっとやってみるか？」と言って　1フレイたけ遊はせてくれました　すっと見ていたのでかなりやれるはすたと自信満々て臨んたのてすか　開始して間もなく一度通ってみたかったワーフトンネルのところでモンスターにふつかり　あっけなく終了　あまりに下手くそてフライトか傷つき　お兄さんにお礼も言わす　逃けるようにしてその場を去りました

　それ以来　駄菓子屋さんのケームコーナーに行きつらくなり　足か遠のいていたのてすか　久しふりに行ってみると　いつものようにお兄さんかハックマンをやっていました　しかし前のようにキャラリーが一人もいません。彼らは、新しいゲーム機をやっている別の人の後ろに群がっていました。なんだかパックマンをやっているお兄さんの背中が寂しそうに見えて、ボクは、「お兄さんは新しいゲームやらないの？」と話しかけてみました。すると、お兄さんはゲームの画面をみつめながら、「オレはシンプルな方が好きだからね。新しいゲームはどうせすぐ飽きちゃうよ」と言いました。

　ボクはシンプルという言葉の意味も知りませんでしたが、なんとなくお兄さんの言おうとしたことがわかったような気がして、ちょっと大人になったような気持ちで、お兄さんのやるパックマンをずっと眺めていました。